

■小学校実践事例 第6学年特別活動

1 議題 みんなが楽しめる「バスケ集会」をしよう 共通事項(1) - (ア)

2 児童の実態

- 自分達で興味のあることを企画し、実践できるようになってきているが、活動の目的が共通理解できずに一部の子どもで活動の大半が進められてしまう面がある。
- 学級全体としての人間関係は大体うまくいっているが、男女間での関係はまだ希薄で、異性を意識するあまり相手の思いやよさを認めようとしたり、協力しようとするまでには至っていない。
- 話し合い活動においては、自分たちで話し合いを進める力は徐々に育ってきているが、学級全員が観点を意識して話し合いを進め、学級みんなが納得できるようによりよい考えをつくり出す力は不十分である。

3 目標

- 2学期の活動のテーマ「一生懸命!」を目指し、学級の友達の立場や気持ちを考えて「バスケ集会」のルールについて話し合い、協力して実践することができるようにする。
- 学級の友達、特に異性の友達の思いや立場を考えながら行動することの大切さに気づき、相手の思いやよさを大切にしながらかわろうとする態度を育てる。
- 「男子も女子もみんなが楽しめるか(目的性)」、「分かりやすいものか(実現性)」の話し合いの観点から、個人やグループでルールを検討し、よりよい考えをつくり上げることができるようにする。

4 計画(1時間+課外)

- 二学期の学級の集会について振り返り、今後の活動の見通しを持たせる。----- 課外
- 議題『「バスケ集会」のルールを決めよう。』について話し合わせる。----- 本時
- 「バスケ集会」を学級の友達と協力して実践させる。----- 課外
- 実践を振り返り、活動の価値や自分や学級の高まりを実感させる。----- 課外

5 活動の実際

【事前の活動】

11月、学級の遊び係の提案から「バスケ集会」を行うことになった。提案理由としては「最近、男子だけ、女子だけで活動することが増えてきている。男女関係なく、クラスのみんながもっと仲良くできるようにしたい」というものであった。

11月の道徳の時間は、内容項目「2-(3)互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助け合う」を学習する。ここでは、資料「絵地図の思い出」を活用して授業を行った。今回の活動と関連付けて、授業の中では、男女間でも同性と同じように、相手の立場になって行動する事の大切さに気付けるように、これまでの生活を振り返らせて指導を行った。授業後の感想では、男子だから女子だからと意識しすぎず、もっと協力していきたいというものが多く見られた。

その後、遊び係から「バスケ集会」のルールについての原案が提案され、それをもとに昼休みを使い、試しのゲームを行った。その活動から、原案に対する質問や意見を出させ、特に意見が分かれたドリブルと得点の項目について学級会で話し合うことになった。

【本時の活動】

- 主眼 1 男女関係なく友達の思いや立場を理解して、運動が得意な人も苦手な人も楽しく取り組むことができるような「バスケ集会」のルールや役割を集団決定できるようにする。
- 2 集会で行うバスケットボールのルールや役割について、男子も女子も楽しめるか、チームで協力して活動できるかの二つから、班や全体で話し合うことができるようにする。

議題；男子も女子もみんなが楽しめる「バスケ集会」のルールを決めよう。

【柱1】ドリブルについて

原案：男子はドリブルなし、パスのみ
女子はドリブルあり

【柱2】得点について

原案：男子がシュートを決めたら1点
女子がシュートを決めたら2点

- 〈話し合いの観点〉
- ・男子も女子もみんなが楽しめるか。 (目的性)
 - ・チームで協力できるルールか。 (相互性)
 - ・みんなが分かりやすいルールか。 (実現性)

↓

〈小集団での交流〉 目的性・実現性の二点から小グループで話し合う。

- ・男子と女子の得点差はあってもいい。
- ・男子もドリブルできないと楽しめない。

話し合いでは、最初はドリブルと得点について個別に審議を進めていったが、関連性があることから二つを並行させて話し合っていた。その話し合いの様子(一部)が下の通りである。

[話し合いの途中から]

- C1： ぼくは、男子はドリブルありがいいと思います。そのわけは、この前(試しの活動)ドリブルなしでやったらあまり楽しめなかったからです。
- C2： 私は反対で、男子はドリブルなしがいいと思います。そのわけは、男子ばかりボールをさわることが多かったので、女子は楽しめなかったからです。
- C3： ぼくもC2さんと同じで、ドリブルなしがいいと思います。そのわけは、この前試しの活動でやった時、ドリブルなしでもパスを使って、チームで協力すれば楽しめたからです。
- (中略)
- C4： 私は男子は歩いてドリブルするようにしたらいいと思います。そのわけは、ドリブルなしだと男子はパスしかできないので、楽しめない人がいます。だから走ってドリブルじゃなくて、歩いてドリブルなら女子も大丈夫だと思うからです。
- C5： 私もC4さんの考えに賛成です。そのわけは、ドリブルができれば男子も楽しめると思うからです。
- C6： ぼくも歩いてドリブルならいいです。歩いてドリブルがOKなら、男子の得点が1点でもいいです。(以下省略)

子ども達の発言を見ると、C1やC3のように、事前に行った試しの活動をもとに自分の考えを発言する姿が見られた。またC2やC3、C4のように、今回の活動の目的である「男子も女子も楽しめるように」という目的性の面を意識した発言が多く見られた。さらにC6のように異性の友達の発言を受け止め、自分なりに折り合いを付けて発言する姿も見られた。

しかし、その後男子の中にもバスケットボールが苦手な子がいること、また女子の中にはバスケットボールを得意にしている子がいることから、男子・女子でルールを変えることに

ついて疑問の声が出された。その話合いの様子は以下の通りである。

司会： これまでの意見を整理します。「男子は歩いてドリブルをして、得点は2点」、「女子はドリブルはありで、得点は1点」という意見が出されていて、賛成している人も多いようです。この考えに決めていいですか。

C7： ぼくはその考えに少し気になることがあります。男子の中には運動が苦手な人もいるので、その人は楽しめなくなると思います。それに、女子の中にはバスケットが得意な人もいるので、男子・女子でドリブルありやなしを決めるのは難しいと思います。

司会： C7さんが出した気になる点について、何かいい解決策はありませんか。

C8： 私は、バスケットを習っているので、ドリブルは歩いてやってもいいです。それから得点も1点でもいいです。

C9： ぼくは、男子・女子ではなくて、バスケットの得意な人、苦手な人でさっきのルールをつかったらいいと思います。

司会： それでは、「バスケットが得意な人はドリブルなしで、シュートを決めたら2点。苦手な人はドリブルはありだけど、シュートを決めても1点」ということに決めたいと思います。みなさん、どうですか。

全員：賛成です。

C10： 私もその考えに賛成です。ただ、チーム分けの時に、得意な人と苦手な人が混ざったチームになるように、みんなが納得できるようなチーム分けにしてください。(以下省略)

話合いの結果、「バスケットが得意な人はドリブルなしで、得点は2点。苦手な人はドリブルはありだが、得点は1点」という考えに集団決定することができた。男子・女子という区切りではなく、運動の得意・不得意という点から原案を見直し、学級のみんながより納得のできるような解決方法を自分達の力で見出すことができた。

【事後の活動】

話合いで決まったルールをもとに、自分達で「バスケ集会」を行った。普段は活動的な男子もルールに従い、歩きながらドリブルをし、パスを使ってゲームを進める姿が見られた。また「男子も女子も楽しめるように」という目的性を意識して、男子も女子もお互いにパスを多く使って楽しんでいた。活動後の児童の感想を見ると、学級の友達、特に異性の友達とこれまで以上に協力できたことに満足感を感じる事ができたようである(資料)。

六年生での思い出
六年生は小学校の最高学年です。今までふり返るといろいろなことがありました。この一年で心に残ったのは、バスケットボール集会です。たんなるバスケットボール集会と最初は思っていました。でも、ある授業をしてから考え方が変わりました。それは、十二月の始めにあった道徳の授業でした。この時、異性に対する考え方という勉強をしました。そこでこれまでの男女グループの時のことを考えると、男子と協力せず、女子とばかり協力していました。だから男子と協力してみよかなという気になりました。そして、その授業が終了後すぐに、たのがバスケットボール集会でした。この時のチームは男子一人、女子三人でした。男子は一人ですが、がんばって協力しようと思いました。でも、意外な事に男子から私にパスをしてくれました。とてもびっくりしたけど、うれしかったです。だからほかの男子とも協力してみようという気持ちになりました。協力して大事件なども思いました。私は、このバスケットボール集会をしてよかったと思いました。チームのみんなと協力して仲も深まりました。男子とも協力できました。これから男女に関係なくみんなと協力していきたいです。そして、中学校になってもこのことを忘れずがんばっていきなさい、思い出を沢山作ってほしいです。

資料：活動後の感想(女子児童)

6 考察

- 男女が関係なく仲良くなりたいたいと子ども達が課題に感じていることを議題として取り上げたことで、自分達で課題解決に向けて活動をつくることの喜びを味わうことができた。
- 道徳の時間の学習と関連付けたことで、学級の全員が活動の方向性をしっかりと共通理解でき、話合いも論点の定まったものになった。